様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２３年　６月　６日現在

機関番号：３５５０５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：平成２１～２２年度
課題番号：２１８２００５４

研究課題名（和文）
韓国人学習者の日本・日本語への葛藤と受容の経験に関するライフストーリー研究

研究課題名（英文）
Life Story Research of the South Korean Learners
—Their Experience of Conflict and Acceptance of Japan and Japanese Language

研究代表者
田中　里奈（TANAKA　RINA ）
山口福祉文化大学・社会福祉学部・その他
研究者番号：４０５３２０３１

研究成果の概要（和文）：
従来の日本語教育史研究の領域では、教科書や政策文書の分析が中心に行われてきたが、教育の受け手である学習者個々の経験は十分には取り上げられてこなかった。本研究では、解放後の韓国において日本語教育が再開された 1960-70 年代に日本語を学び始めた学習者のライフストーリーに着目し、旧宗主国のことばである日本語への葛藤と受容のプロセスを明らかにすることを目的とした。学習者の多くは、日本語を学んでいることを奇異の目で見られたり、「なぜ日本語なんかを勉強しているのか」という問いかけに遭うなどの経験をもち、日本語学習に対する後ろめたさを感じていた。また、教材や人材の不足という状況の中で、日本語への興味を失いかけていた学習者もいた。しかしながら、個々の学習者が日本語を学ぶことに対して独自の意味を見出していたことが、恵まれていない状況下での学習維持に繋がっていたということが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
In the research area of Japanese teaching history, while the textbook and the policy guideline had been the main target of analysis, the experience of learners who received the education had not sufficiently been taken up as subject. This study, thus, focused on the life stories of the South Korean people who began to study Japanese language in the 1960-70's, when Japanese language education was started again after World War Ⅱ. The aim of this study was to clarify the process of their conflict and acceptance of Japanese language, a language of former suzerain . As the result of my research, it was found that most of the learners had had the experiences that they had encountered the question "Why are you studying Japanese?", been looked with a jaundiced eye, and felt inferior about studying Japanese. Moreover, there were also a lot of learners who lost the interest in Japanese language in the situation where no sufficient teaching material and teacher was available. However, this research also clarified that some learners kept their motivations by finding their own meaning for studying Japanese even under such a disadvantageous situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２１年度	910,000	273,000	1,183,000
２２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,510,000	453,000	1,963,000

研究分野：日本語教育
科研費の分科・細目：日本語教育史
キーワード：日本語教育史、ライフストーリー、

１．研究開始当初の背景

戦後の日本語教育は、「国際交流」のための日本語教育として位置づけられ、帝国主義体制下での日本語教育とは区別され、扱われてきた。しかしながら、戦前・戦中期に日本語を学ぶことが強要された歴史をもつ地域では、1945 年に「解放」を迎えたからといって、そのような記憶がすぐに忘却されたわけではなかった。解放後の旧植民地地域において、比較的早く日本語教育は再開されたが、日本や日本語に対する反感や抵抗が完全に払拭されたとはいえない。

今日、世界最多の学習者が日本語を学んでいる韓国においても、日本語教育が再開された 1960～70 年代は、反日感情が今以上に強く、日本語教育の再開を反対する声が強かったという。従来の研究では、韓国における解放後の日本語教育再開期に関して、政策文書や教科書の分析から、その実態を明らかにしようとする試みが行われてきた（金 2008;河先 2003 等）。また、その教育の受け手であった学習者に関する研究では、日本語の学習動機を問うアンケート調査など（金 1976）が行われてきた。しかしながら、学習者の具体的な意味づけが取り上げられたことはほとんどなく、日本や日本語に対してどのような葛藤をし、そして、受容していったのかに関しては着目されてこなかった。要するに、実際に教育を受けた人々の視点からは、日本語教育の歴史が十分には明らかにされてこなかったのである。

文献

河先俊子.2003.「植民地解放後の韓国における日本語教育再開期に関する一考察」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』26:3-24.
金賢信.2008.『異文化間コミュニケーションからみた韓国高等学校の日本語教育』ひつじ書房.
金鐘學.1976.「韓国の高校における日本語教育」『日本學報』4：151-159.

２．研究の目的

本研究では、上記のような研究背景と問題意識に基づき、(1)～(3)の研究目的を設定した。

(1)反日感情の強い社会状況の中で学習者はなぜ日本語を自ら選択したのか。
(2)日本や日本語に対する反感や抵抗があったならば、それはどのような葛藤のプロセスを経てどのように受容されたのか。
(3)日本語学習や教育は個人史の中でどのような意味をもつのか。

３．研究の方法

本研究では、以下の方法で研究を遂行することとし、特に(2)を重点的に行った。

(1) 韓国の日本語教育に関する論考や政策文書の収集と分析
(2) 1960～70 年代に日本語を学び始めた学習者へのライフストーリー・インタビュー調査と分析

本研究では、日本語学習に関する具体的な経験とそれに対する意味付け、および、経験による認識の変化を明らかにすることを目的としているため、Hermanns の Narrative Interview(Flick 2002)に従って、ライフストーリーの聞き取り調査を行った。研究協力者は、スノーボール・サンプリング法で選ばれた 1960～70 年代に日本語を学んでいた学

習者 25 名である。
インタビューにおいては、それぞれのライフストーリーを丁寧に聞き取る方針で行ったが、その中でも主に以下の５つを重点的に聞き取るよう心がけた。

(1)反日感情の強い社会状況の中で、日本語学習を選択することにした理由。
(2)学習開始当初の日本や日本語に対する感情。
(3)帝国主義体制下で行われていた「同化」を目的としていた日本語教育をどのように解釈しているか。
(3) 学習者から教員という変化の中で、日本語や日本への意味づけ、認識はどのように変化したか。
(4) 日本語学習/日本語教育が人生においてどのような意味をもつのか。

なお、分析には、個人の人生の軌道を再構成する Wengraf(2001)のナラティブ分析を主に採用し、分析・考察を行った。

文献
Flick,U.2002. *An introduction to qualitative research*. Sage Publications.

Wengraf,T.2001.*Qualitative Research Interviewing*. Sage Publications.

４．研究成果
本研究を開始した平成 21 年から現在までに、当時日本語を学習していた 25 名にライフストーリー・インタビュー調査を実施した。一人につき 1～3 回、1 回 1.5～3 時間のナラティブ・インタビューであった。
インタビュー、および、その分析から以下のことが明らかとなった。

(1) 協力者たちの多くは、「なぜ日本語を勉強するのか」と周囲から奇異の目で見られるなどの「日本語に対する評価の低さ」を感じ、日本語学習への後ろめたさを感じていたこと。
(2) (1)に加え、教材不足・人材不足といった「教育環境の不整備」といった状況に不満をもち、日本語学習そのものに興味を失いかけていた学習者も相当数いたこと。
(3) しかしながら、そうした状況に対して、それぞれが、日本語を学ぶことに対して独自の意味を見出し、学習を維持しようとするプロセスがあったこと。

（学会発表①、図書①）

研究開始当初は、1960～70 年代に日本語を学んでいた人々へのインタビューのみを計画していたが、スノーボール・サンプリング法でインタビュー協力者を紹介してもらう過程で、当時実際に日本語教育に携わっていた人々からも語りを聞きとる機会があった。そこで、(1)解放前に日本語を「国語」として学び、1960～70 年代に日本語教育に携わっていた教師 3 名、(2)「在日コリアン」として生まれ育ち、韓国に帰国して日本語教育に従事していた教師９名にもインタビュー調査を並行して実施した。一人につき 1～4 回、1 回 1.5 時間～5 時間のナラティブ・インタビューであった。
特に、(2)の「在日コリアン」教師の中には、日本語を教えていることに抵抗感をもっていた教師や、子弟に対しては日本語の教育を行わなかった教師などがいたことが明らかとなった。「母語」として身につけた日本語に対する韓国社会における評価が好ましくなかったことから複雑な思いを抱きながら日本語教育に携わっていた。当時の日本語学習者たちが感じ取っていた、韓国社会における日本語への緊張感を裏付ける語りを聞きとることができた。（学会発表②・③、雑誌論文①）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 田中里奈、「「カテゴリー」化されることへの拒絶とその戦略的利用－在日コリアンとして生まれ育った在韓日本語教師への「日本語」の意味づけをめぐる語りを手がかりに」、『日本移民年報』、17 号、pp. 97-108、2010 年、査読有.

〔学会発表〕（計３件）
① 田中里奈、「韓国人日本語教師のライフストーリー」、世界日本語教育大会、2010 年 7 月 31 日、於：台湾政治大学（台湾）.

② 田中里奈、「韓国に住む元在日コリアン日本語教師のアイデンティティの葛藤」、第 20 回日本移民学会、2010 年 6 月 27 日、於：立命館大学.

③ 田中里奈、「在日コリアン教師として生まれ育った在韓日本語教師の経験の語り」、第 25 回社会言語科学会、2010 年 3 月 13 日、於：慶応義塾大学.

〔図書〕（計１件）

① 田中里奈、「「日本語の学習はどのように選択され、意味づけられたのか―1960-70年代に日本語を学んだ韓国人日本語教員へのライフストーリー・インタビューからの一考察―」、『日本語教育史論考第二輯』、冬至書房、印刷中、査読有.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

該当なし

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　里奈（TANAKA　RINA ）
山口福祉文化大学・社会福祉学部・その他
研究者番号：４０５３２０３１

(2)研究分担者

該当者なし

研究者番号：

(3)連携研究者

該当者なし

研究者番号：